Tsukuba Psychological Research
2002, **24**, 263-272

中学生の評価懸念の高さと自己概念特徴との関連

筑波大学大学院（博）心理学研究科　山本　淳子

筑波大学心理学系　田上不二夫

The relations between fear of negative evaluation and self-concept in junior high school students

Junko Yamamoto and Fujio Tagami (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study investigates the relations between fear of negative evaluation, type of self-concept in junior high school students. Questionnaires were administered to 427 students in order to measure their fear of negative evaluation, the two types of positive self-concept (from own perspective and from that of closest friends), and two motivational states for social approval (acquiring praise and avoiding rejection). The results indicate that: (1) Fear of negative evaluation was influenced both by the motivational states for acquiring praise and for avoiding rejection. (2) Students with marked high positive self-concept from own perspective but low from closest friends scored high on two motivational states for social approval and fear of negative evaluation. (3) Students with marked low positive self- concept from own perspective but high from closest friends scored high on the motivational states for avoiding rejection and fear of negative evaluation. This study suggests that having a match between self-concept from own perspective and from that of closest friends are important in reducing the fear of negative evaluation.

Key words: fear of negative evaluation, self-concept, social approval, junior high school students.

問題と目的

評価懸念（fear of negative evaluation）とは，他者からの評価に対する心配や，否定的に評価されるのではないかという予測に対する心配の程度を示す概念である（Watson & Friend, 1969）．Warren, Good & Velten（1984）によれば，評価懸念は仲間との相互作用を妨げ，学級の中での孤立や，仲間からの拒絶を導くという．“もし悪く評価されたらどうしよう”と常に気にしてしまう子どもにとって，学校はきゅうくつな，あまり居心地のよくない場所と感じられるのではないかと思われる．

評価懸念は，対人不安傾向における重要な次元のひとつであり（松尾・新井，1998），従来から，否定的な自己概念や低い自己評価が対人不安傾向と密接に関連していることが指摘されてきた（Cheek & Buss, 1981；本間，1994）．また，肯定的に自己を捉えられない人は，低い自尊心を傷つけたくないために，社会的承認を強める傾向にある（Martin, 1984）．この承認されたいとの欲求に関して菅原（1986）は，従来ひとつの概念で考えられてきたものが，実は“賞賛され，好かれたい”との賞賛獲得欲求と，“他者から嘲笑されたり，拒否されたくない”との拒否回避欲求の，２つの別々な欲求からなることを明らかにし，後者の欲求が公的自意識の強い人にみられる対人恐怖症的傾向の背景に存在すると述べている．他者から賞賛されるような積極的なやりかたで集団に承認してもらおうとするのは，肯定的に自己を捉えることができない生徒にとっては，困難であることが予測される．肯定的自己概念

や自尊心の欠如は，拒否されたくない欲求のほうを強め，それによって否定的な評価を過剰におそれることになるのではないだろうか．

では，子どもの自己が肯定的であるとは，どのような状態を指すのであろうか．一般に自己概念というときには，実際の自分自身の認知像（現実自己）を指すことが多い．子どもの自己概念についての研究でも，現実の自己像がポジティブである場合には適応感が高いこと（徳田，1961），不登校生徒の現実自己は一般の中学生に比べ内閉的・神経症的傾向であること（渡邊・長谷川，1972）が明らかにされている．したがって，「現実自己」そのものをポジティブに評価できるか否かは，中学生の自己肯定感の指標となり得ると言えよう．

また，自己は環境との相互作用をとおして社会的に形成されるものである（榎本，1998）．年齢の上昇に伴い，子どもは自分の視点からみた自己（現実自己）に加え，2つめの自己－他者の視点からみた自己－をもつことになる（柏木，1992）．これら2つの自己は互いに独立の関係ではなく，状況の変化によって，現実自己は修正・変容の必要に迫られる．このとき，それまで安定していた現実自己は，一時的に不安定なものになるだろう．それでも多くの人は，2つの自己の折り合いをつけながら，再び安定した現実自己を維持していくのではないかと思われる．

しかし，思春期は，自己の分化に伴って自己のなかに対立する属性が増え，かつそれが自己を混乱させる時期である（Harter，1990）．また Rosenberg（1986）は，13歳前後に最も自尊心が低下すると予測している．こうした発達的特徴を考慮すると，修正と変容に迫られて生じる自己の“揺らぎ”を，自らの力で支え，再び安定した自己を取り戻すことは，中学生にとって容易であるとは言いがたい．彼らの現実自己は，それを“重要な他者が肯定してくれている”いう認知に支えられて，安定したものになっていくのではないだろうか．つまり，中学生が自己を肯定的に認知できるか否かには，現実自己だけでなく，重要な他者の視点から自己をとらえなおしたとき，それをどの肯定することができるかも関わっていると考えられる．

また，中学生にとっては，学校でふだん一緒に行動するような特定の友人が，身近で重要な他者として捉えられる（藤田・伊藤・坂口，1996）．中学生にとっての友人は，それまでの友人とは異なった重要性と意義とを獲得する（Blos，1971）．同年代の他者である級友みんなが重要な他者となるわけではなく，自分なりに選択して一緒に行動している特定の友人が，学校場面で最も身近な，重要な他者となるのである．そこで，本研究では，中学生の重要な他者の視点からみた自己を「友人推測自己」と呼び，それと「現実自己」との2つから中学生の自己概念を特徴づけることとする．

中学生の自己と評価懸念との関連について考えると，現実自己評価が低い場合，仲間から自分が拒否される場面が想定されやすく，拒否回避欲求が強まり，それによって評価懸念が高まることが予測される．だが，このとき友人推測自己が肯定的であれば，仲間から拒否されたくないという欲求は強まらないのではないかと思われる．したがって，評価懸念も，現実自己と友人推測自己の両方が肯定的でない生徒に比べ，それほど高くならないのではないか．一方，現実自己が肯定的であっても，友人推測自己がそうでない場合には，賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が両方とも高くなるのではないかと考えられる．自分では自己を肯定できていても，友だちからみた自己が肯定的でない場合，現実自己が過小評価されているように感じるであろう．そのため積極的な方法で仲間から承認を得たいという欲求が強まるが，親しい友だちが自己を肯定してくれていないとの認知は，肯定的な現実自己を揺らぎやすいものにさせ，賞賛獲得の失敗を予測させるかもしれない．したがって，拒否回避欲求も賞賛獲得欲求と同時に高い傾向にあると考えられ，両欲求が高いことが評価懸念に結びつくと予測される．

以上のことから本研究では，以下の2点について検討することを目的とする．第一に，拒否回避欲求だけでなく，賞賛獲得欲求も評価懸念を高める方向で影響を及ぼすとの仮説について検討を行う．第二に，現実自己と特定の友人の視点からみた自己（友人推測自己）の2つの自己から，中学生の自己の特徴を記述し，それが賞賛獲得欲求と拒否回避欲求，および評価懸念の高さとどのように関連しているかについて明らかにする．

方　法

1．調査時期および対象

2000年10月，関東・北陸圏の公立中学校に所属する1，2，3年生の男女生徒427名を対象として調査を実施した．学年・性別の構成は，Table 1に示す通りである．

2．調査内容および手続き

以下の3種類から構成される質問紙調査票を用いた．なお，調査は各学級で一斉に行われ，各生徒が

Table 1　調査対象生徒の学年別，男女別構成

学年	男子	女子	計
1学年	62	55	117
2学年	73	68	141
3学年	87	82	169
計	222	205	427

封筒を用いて密閉した後，教師によって各クラスごとに集められ，郵送により回収された．

1）評価懸念尺度

山本（2001a）が作成した否定的な評価に対する不安を測定するための尺度であり，10項目からなる．5件法で評定を求め，評価懸念が高いほど得点も高くなるように，得点化を行った（Appendix 1）．

2）中学生用自己概念尺度

山本（2001b）が作成した，ポジティブ領域15項目・ネガティブ領域15項目から構成される尺度である．本研究では，ポジティブ領域に含まれる15項目を用いて，以下の3側面から回答を求めた（Appendix 2）．

①現実自己：「次の文は，あなたの『いいところ』にどれくらいあてはまりますか」という教示のもと，5件法で，自己に対して肯定的にとらえているほど得点が高くなるように，得点化を行った．

②理想自己：「どのくらい『そうなりたい』と思いますか」という教示のもと，5件法で回答を求め，そうなりたいと思っているほど得点が高くなるように得点化を行った．

③友人推測自己：重要な他者の視点から推測する自己を測定する場合に，「他者とはどのくらい有意味な他者なのか」について明確にする必要がある（田中・原野，1992）．そこで本研究では，教示文において「ふだん，学校でよくいっしょにいる友人」を2～3人思いうかべるように指示し，その友人の視点から回答するよう求めた．5件法で，友人の視点からみた自己を肯定的に評価しているほど得点が高くなるように得点化を行った．

3）賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度

菅原（1986）が作成した，他者から承認を受けたいという意識を2側面に分けて測定する尺度である．9項目について5件法で回答を求め，それぞれの欲求を強く感じているほど得点が高くなるように得点化した．

結　果

1．評価懸念の性・学年差の分析

評価懸念尺度10項目の合計得点を算出し，性および学年を要因とした分散分析を行った結果，男子と女子の平均値に有意な差がみられ（$F[1/412]=23.59$，$p<.001$），女子（$M=33.09$，$SD=8.29$）が男子（$M=28.47$，$SD=9.46$）よりも高かった．学年差と交互作用はみられなかった（Table 2）．

2．賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の性・学年差の分析

賞賛獲得欲求尺度と拒否回避欲求尺度についてそれぞれ合計得点を算出し，性及び学年を要因とした分散分析を行った．その結果，賞賛獲得欲求では性差・学年差ともに見られなかった．また，交互作用も見られなかった．拒否回避欲求では，男子と女子の平均値に有意な差がみられ（$F[1/412]=15.00$，$p<.001$），女子の方が男子よりも高かった．また，学年差と交互作用はみられなかった（Table 3）．

3．評価懸念と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の両方が，評価懸念を高める方向で働くとの予測について検討するため，男女ごとに，評価懸念を基準変数とした重回帰分析を行った（Table 4）．

その結果，賞賛獲得欲求と評価懸念との間の標準偏回帰係数は，男子では$\beta=.37$（$p<.001$），女子では$\beta=.26$（$p<.001$）であり，男女とも，評価懸念を高める方向で影響を及ぼすことが明らかとなった．同様に，拒否回避欲求と評価懸念との間の標準偏回帰係数は，男子では$\beta=.26$（$p<.01$）であり，賞賛獲得欲求と評価懸念との間の標準偏回帰係数よりもやや小さかった．女子では$\beta=.45$（$p<.001$）であり，賞賛獲得欲求と評価懸念との間の標準偏回帰係数よりも大きかった．このように，男女によってどちらの欲求が評価懸念により大きな影響を及ぼしているかは異なるが，2つの欲求はともに評価懸念を高める働きをもつことが明らかとなった．

4．自己の特徴と他の変数との関連

自己の特徴を「現実自己」「友人推測自己」の得点の高低から記述し，その特徴によって，賞賛獲得欲求，拒否回避欲求，および評価懸念の程度に差がみられるか否かについて，分散分析を用いて検討を行った．

Table 2　評価懸念尺度における学年別，性別の平均値と分散分析結果

	1年(117)		2年(141)		3年(169)		性差	学年差	交互作用
尺度	男(62)	女(55)	男(73)	女(68)	男(87)	女(82)	F-Value	F-Value	F-Value
評価懸念	29.36	32.87	26.43	33.60	29.63	32.80	23.59***	1.16 n.s.	2.74 n.s.
	(9.61)	(8.06)	(8.83)	(8.56)	(9.94)	(8.26)	男<女		

(括弧内は標準偏差)　　*p<.05　**p<.01　***p<.001

Table 3　賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度における学年別，性別の平均値と分散分析結果

	1年(117)		2年(141)		3年(169)		性差	学年差	交互作用
尺度	男(62)	女(55)	男(73)	女(68)	男(87)	女(82)	F-Value	F-Value	F-Value
賞賛獲得欲求	14.26	14.65	14.28	14.68	14.53	14.60	0.48 n.s.	0.03 n.s.	0.07 n.s.
	(3.72)	(4.24)	(4.74)	(3.40)	(4.50)	(4.06)			
拒否回避欲求	14.29	15.84	14.08	15.94	14.88	15.03	13.65 ***	0.01 n.s.	2.18 n.s.
	(3.61)	(2.46)	(3.81)	(2.64)	(3.74)	(2.99)	男<女		

(括弧内は標準偏差)　　*p<.05　**p<.01　***p<.001

Table 4　賞賛獲得欲求，拒否回避欲求，および評価懸念間の重回帰分析結果

基準変数	評価懸念					
	男子		女子		全体	
説明変数	r	β	r	β	r	β
賞賛獲得欲求	.46	.37***	.46	.26***	.44	.26***
拒否回避欲求	.39	.26**	.56	.45***	.48	.37***
R(重相関係数)	.52***		.61***		.52***	

*p<.05　*p<.01　***p<.001

まず，自己概念は個人の主体性が明瞭に反映される方法で測定・得点化される必要がある（Moretti & Higgins, 1990）．そこで遠藤（1992）を参考に，「理想自己」において各被験者が評定値5をつけた特性を「個人にとって重要な特性（以下，重要特性）」とみなし，「現実自己」の得点については，ΣR_A（R_A：各個人の重要特性の現実自己得点）をNA（各個人の重要特性の項目数）で割り，算出した．同様に，「友人推測自己」の得点は，ΣO_A（O_A：各個人の重要特性の友人推測自己得点）をN_Aで割り，算出した．その後，得点化された「現実自己」および「友人推測自己」について，性と学年を要因とした分散分析を行った．その結果，「現実自己」において性差がみられ（$F[1/391]=14.32$, $p<.001$），男子（$M=3.11$, $SD=.95$）のほうが女子（$M=2.79$, $SD=.64$）よりも有意に高かった．また，「友人推測自己」でも性差がみられ（$F[1/391]=8.93$, $p<.001$），男子（$M=3.17$, $SD=.96$）のほうが女子（$M=2.92$, $SD=.80$）よりも高かった．そこで，男女ごとに以下の方法で4群を抽出した．

(1) 両自己高群（男：$N=62$，女：$N=70$）：「現実自己」「友人推測自己」ともに平均値＋0.25*SD*以上である群．この群に属する生徒は，現実自己と友人推測自己の両方を肯定的に捉えている．

(2) 現実自己高群（男：$N=39$，女：$N=31$）：「現実自己」は平均値＋0.25*SD*以上だが，「友人推測自己」は平均値－0.25*SD*以下である群．この群に属する生徒は，現実自己の肯定度は高いが，友人からみた自己の肯定度が低い．

(3) 推測自己高群（男：$N=36$，女：$N=38$）：「現実自己」は平均値－0.25*SD*以下だが，「友人推測自己」は平均値＋0.25*SD*以上である群．この群に属する生徒は，現実自己の肯定度が低いものの，友人からみた自己の肯定度は高い．

(4) 両自己低群（男：$N=55$，女：$N=77$）：「現実自己」「友人推測自己」ともに平均値－0.25*SD*以下である群．この群に属する生徒は，現実自己と友人

推測自己の両方とも肯定度が低い．

以上の方法により抽出された4群間において，賞賛獲得欲求・拒否回避欲求，そして評価懸念の程度に差が見られるか否かについて検討を行った．

1）自己の特徴と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連

まず，賞賛獲得欲求を従属変数として分散分析を行ったところ，男女とも群間に有意な差がみられた（男子：$F[3/194]=3.40$, $p<.05$　女子：$F[3/196]=4.18$, $p<.01$）．そこで，テューキー法による多重比較を行った結果，男女とも，「現実自己高群（男子：$M=16.32$, $SD=3.28$　女子：$M=17.18$, $SD=4.40$）」の平均値が「推測自己高群（男子：$M=12.13$, $SD=4.66$　女子：$M=13.94$, $SD=4.25$）」よりも高かった（Fig. 1）．「両自己高群（男子：$M=15.03$, $SD=4.17$　女子：$M=15.76$, $SD=3.43$）」と「両自己低群（男子：$M=14.29$, $SD=3.97$　女子：$M=14.18$, $SD=3.71$）」については，他の群との有意な差はみられなかった．

次に，拒否回避欲求を従属変数として分散分析を行った．その結果，男女とも群間に有意な差がみられた（男子：$F[3/194]=6.07$, $p<.01$　女子：$F[3/196]=5.19$, $p<.01$）．そこで，テューキー法による多重比較を行った結果，男女とも，「現実自己高群（男子：$M=16.58$, $SD=3.04$　女子：$M=17.36$, $SD=1.75$）」と「推測自己高群（男子：$M=16.56$, $SD=2.92$　女子：$M=17.50$, $SD=2.66$）」の平均値が「両自己高群（男子：$M=13.71$, $SD=3.61$　女子：$M=15.02$, $SD=2.97$）」よりも高かった（Fig. 2）．「両自己低群（男子：$M=15.07$, $SD=3.28$　女子：$M=15.78$, $SD=2.67$）」については，他の群との有意な差はみられなかった．

以上の結果から，現実自己高群は2つの欲求のいずれも高いが，推測自己高群は，賞賛獲得欲求が低く，拒否回避欲求が高いということ，また，この傾向は男女共通であることが明らかになった．さらに，賞賛獲得欲求と拒否回避欲求は，現実自己と友人推測自己の肯定度のいずれか一方の高さでは規定されないことが示された．

2）自己の特徴と評価懸念との関連

次に，評価懸念を従属変数として分散分析を行ったところ，男女とも群間に有意な差がみられた（男子：$F[3/194]=6.55$, $p<.001$　女子：$F[3/196]=9.43$, $p<.001$）．そこで，テューキー法による多重比較を行った結果，男子では，「現実自己高群（$M=32.26$, $SD=9.93$）」と「推測自己高群（$M=35.31$, $SD=10.65$）」の平均値が「両自己高群（$M=26.42$, $SD=8.62$）」よりも高かった．また，「両自己低群（$M=31.16$, $SD=10.20$）」については，他の群との有意な差はみられなかった．女子では，「現実自己高群（$M=40.6$, $SD=6.02$）」と「推測自己高群（$M=40.67$, $SD=8.95$）」の平均値が「両自己高群（$M=30.85$, $SD=7.36$）」と「両自己低群（$M=33.35$, $SD=8.53$）」よりも高かった（Fig. 3）．

以上の結果から，推測自己高群と現実自己高群の評価懸念が高いこと，また両自己高群と両自己低群との間に差がみられないことが，男女共通の傾向として示された．さらに女子では，現実自己と友人推測自己の両方とも肯定度の低い生徒が，2つのうちいずれかの自己の肯定度が高い生徒よりも，評価懸念が低いことが明らかになった．

考　察

1．評価懸念と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連

重回帰分析の結果から，賞賛獲得欲求と拒否回避

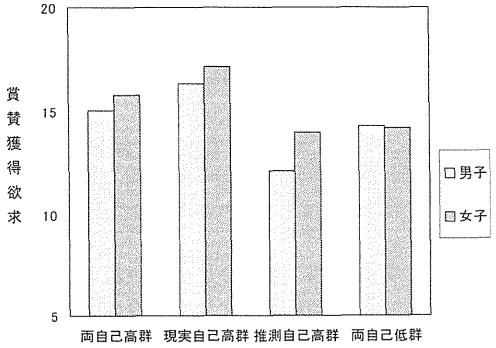

Fig. 1　各自己概念タイプと賞賛獲得浴求との関連

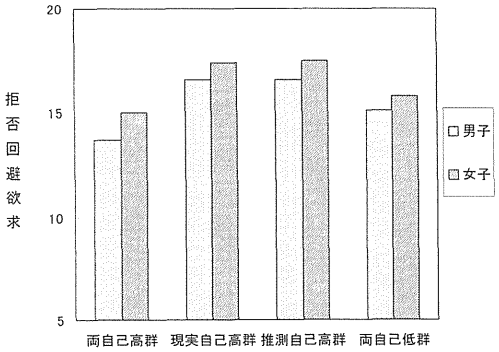

Fig. 2　各自己概念タイプと拒否回避浴求との関連

欲求は，ともに評価懸念を高める方向で働くことが示された．この傾向は男女共通にみられたが，影響の強さは男女によって多少異なっていた．とくに拒否回避欲求は，女子において男子よりも評価懸念に大きな影響を及ぼしていた．また，性差に関する分析の結果から，女子が男子よりも高い拒否回避欲求を持っていることが明らかである．しかし，これらの結果から，女子は消極的な方法，男子は積極的な方法で集団に所属しようとする傾向にあるとは言えない．なぜなら，賞賛獲得欲求自体には性差がみられず，男子だから（あるいは女子だから）という理由で，積極的に集団に所属しようという欲求の強さが異なるわけではないからである．むしろ，これらの結果は，集団に承認されうまく所属していたいという欲求が，男子より女子において高いことを示していると考えられる．

これには，中学生の友人関係における特徴が関連しているのではないだろうか．たとえば，中学生の友だちグループの規模は，概して男子よりも女子の方が小さく，またそのメンバーの流動性も小さい（藤田他，1996）．それに加え，女子は男子よりも「現在の仲間とはぐれたら戻れない」と強く感じている（東京都立多摩教育研究所，1999）．このことから，女子は男子よりも，友だちと閉鎖的で濃密な関係をつくっており，かつグループ間をたやすく行き来できない状況にあることが推察される．女子にとって，他のグループに入れてもらうことは男子よりも難しく，どのグループにも所属できない結果，教室での居場所を失ってしまうことにもなりかねない．そうだとすれば，女子にとって集団からの承認を得ることは男子よりも切実な問題となってくる．しかし，承認されたい欲求が強くなると，それだけ他者からの評価に過敏になってしまい，高い評価懸念を抱えることになってしまう．女子の評価懸念が男子より高かったことも，こうした友人関係における性差が関連していると考えられる．

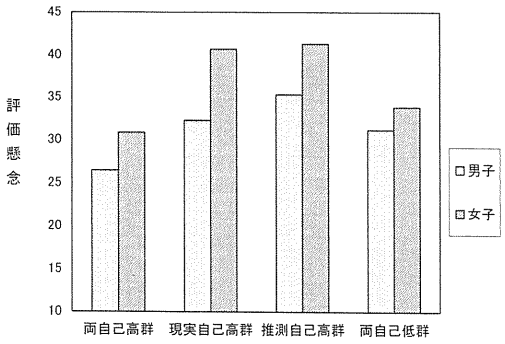

Fig. 3　各自己概念タイプと評価懸念との関連

さて，両欲求が評価懸念を高めるとの予測は支持され，なかでも男子では，賞賛獲得欲求のほうが評価懸念との関連がやや強いことが分かった．賞賛されたいという積極的な姿勢は，公的自意識の高い人の「自己顕示性」を示している（菅原，1986）．自己顕示性は，他者からの“まなざし”に対する積極的な姿勢であり，防衛的姿勢を基調とする対人不安の傾向とは相反するものと考えられている（菅原，1988）．だが，本研究の結果はこの知見に沿うものではなかった．公的自意識の高さに関連する自己顕示性とまなざしに対する不安とは，相反する関係にあるものなのだろうか．

中学生の年齢層では，他者の視点からみた自己と現実自己との折り合いをつけ難く，自己が不安定になるなかで，自尊心も低下していく．しかし，だからこそ自己をより高く位置付けようと自己顕示的になるのではないだろうか．また，中学生が友人関係に適応し，中学校生活をうまく泳ぎ抜くためには，「明るく」「おもしろく」しかも「人から浮き上がることのないように」と自分をコントロールしなければならない（東京都立多摩教育研究所，1999）．つまり，現実自己を低めないためにも，集団にうまく所属するためにも，自己顕示性は中学生にとって必要なのである．しかし，自己顕示的な姿勢が自信に満ちた自己から生じたものではない場合，それが仲間から拒否されるおそれが常につきまとうことになる．そのために，自己顕示性に伴って防衛的，消極的な心性が生じることになるのではないだろうか．

以上のように考えると，自己顕示性は拒否回避性と相反するものでなく，それらが混在してしまうところにこそ，不安の高さに結びつく問題があるように思われる．この点については，他の発達段階と各段階にみられる心理的特性を考慮した，さらなる検討が必要であろう．

2．自己の特徴と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連

「現実自己」と「友人推測自己」の高低から中学生のもつ自己概念の特徴を記述し，その違いによって各欲求の程度に相違が見られるか否かについて検討を行った．

第一に，男女とも，現実自己高群の賞賛獲得欲求が強いことが明らかになった．現実の自己像を肯定していても，特定の親しい友だちがそれを認めてくれていないと感じている子どもは，「注目をあびた

い」「気のきいたことを言って人を感心させたい」といった欲求が強い．友だちが自分を過小評価しているように感じていると，賞賛獲得への欲求を強く持つことも自然なことなのかもしれない．しかしその一方で，拒否回避欲求が強いのも，この現実自己高群の特徴である．一緒にいる友だちに認められていないという意識は，現実自己が肯定的であるがゆえに，もっと自分の良い点が評価されてもよいはずだという思いにつながるであろう．しかし，実際には，現実自己高群に属する子どもは賞賛獲得のための行動をとることができないのではないだろうか．なぜなら，「友だちが自分の良いところを理解していない」との意識から生じる，拒否されたくない気もちもまた強いからである．そう考えると，現実自己高群に属する子どもは，承認を得るための行動をとることができず，ますます認められたい気もちばかりが強まるという悪循環に陥ってしまうおそれがある．

一方，現実自己高群と両自己高群との間で賞賛獲得欲求の程度には差がみられないが，拒否回避欲求は両自己高群の方が低かった．現実自己が重要な他者である友人からの肯定によって支えられている場合には，その自己顕示的姿勢は，安定した肯定的自己を背景に他者からの拒否を恐れないものになる．つまり，賞賛されたい欲求の背景にある自己の揺らぎやすさによって，それが拒否回避欲求を伴う葛藤に結びつきやすくなることが考えられよう．

第二に，推測自己高群は拒否回避欲求が高いが，逆に賞賛獲得欲求は低いことが明らかとなった．また，この傾向は男女とも共通であった．推測自己高群に属する子どもは，実際の自己像を自分で肯定できないでいる反面，友だちは自己を過剰によくみていると認知している．すなわち，気の利いたことを言って友だちの関心を引かなくとも，すでに友だちから肯定的なフィードバックを受けているのである．したがって，それ以上賞賛されたいという欲求は高くないのであろう．ところが自分が思っている以上に友だちからよく評価されていると認知しているために，肯定的評価にあてはまらない本来の自己を人前にさらけ出すことを躊躇することとなる．そのために，誰からも拒否されたくないという欲求が高いのではないか．

このように考えると，推測自己高群に属する子どもは，消極的な方法，すなわち「だれからも嫌われないですむ」方法，あるいは「できるだけ敵をつくらない」方法で行動しようとするのではないかと思われる．すなわち常に周囲の人に認めてもらえるように“自分”を演じているのではないだろうか．他者からの肯定が積極的行動に結びつかないのは，それが本人にとって，演じた自分に対する肯定としか捉えられないためかもしれない．また，誰からも嫌われないような，消極的な行動をとることでは，友だちの視点からみた「過剰に肯定的な自己」と現実自己の距離が狭まることはないだろう．結果的に，自分に対する友だちからの評価が高まることはあっても，あるがままの自分を友だちに知ってもらう機会は少なくなってしまうと考えられる．

3．自己の特徴と評価懸念との関連

最後に，中学生の自己の特徴の違いによって評価懸念の程度に相違が見られるか否かについて，検討を行った．その結果，男女とも現実自己高群と推測自己高群の評価懸念が両自己高群よりも高いことが示された．

第一に，現実自己高群の評価懸念が高いことは，友人の視点からみた自己を肯定できることの重要性を示すものであり，本研究の予測が部分的に確認されたと言える．また，この結果は「評価懸念が高いということは，必ずしも自分自身を否定的に評価しているということを意味しない」との知見（Watson & Friend, 1969）を支持するものと思われる．

現実自己高群に属する子どもの現実自己は，友人推測自己が現実自己よりも肯定的でないため－つまり，現実自己が特定の友人からの肯定に支えられているわけではないため－，たとえ肯定的であっても非常に揺らぎやすいものと考えられる．現実自己高群の子どもにとって，教師や他の級友からの否定的評価にさらされることは，その不安定な肯定的自己像を脅かすものになりかねない．また，賞賛獲得欲求と拒否回避欲求がともに高いのも，この現実自己高群である．先述のように，自己の揺らぎは両欲求を同時に高める要因となるであろう．そこから生じる葛藤状態が，ますます承認への欲求を高め，他者からの否定的評価に対して敏感にさせるのではないかと思われる．

第二に，推測自己高群の評価懸念が高いことが明らかになった．友人からみた自己を肯定できているという点で，推測自己高群は，周囲からみれば友人と良好な関係を保っている子どもと思われるかもしれない．だが，特定の友人が自分に対して過剰に肯定的なイメージをもっているという状況を推察すると，本音の自分をみせられないまま，表面的な関係が維持されている可能性も考えられる．教師や級友から否定的な評価を受けることは，そうした関係を危機にさらすものとなるかもしれない．この群の評

価懸念の高さには，不完全な自分を露呈することへのおそれが反映していると考えられよう．

また，推測自己高群に属する子どもは賞賛獲得欲求が低く，拒否回避欲求は高かった．現実自己高群に関する結果から，評価懸念は自己顕示性と拒否回避性が混在することによって高まると考えられるが，推測自己高群の場合は，この仮説はあてはまらないのであろうか．この点について，推測自己高群の賞賛獲得欲求が低いことが，自己顕示性の低さをあらわしているのかという観点から考えてみたい．

推測自己高群に属する子どもは，現実自己を肯定できないながら，親しい友だちの前では肯定されるような自分を演じていると考えられる．この状況を，自己顕示が成功している状況と捉えられないだろうか．穿った見方かもしれないが，自己顕示性が高いからこそ，現実の自己を隠そうとし，「ポジティブな特性をたくさん持っている子」を演じることをやめられないのではないだろうか．現実自己の肯定度が低い子どもによる，言わば“つくられた”肯定的自己像を，彼らの自己顕示の結果として考えると，推測自己高群の評価懸念の高さもまた，自己顕示性と防衛的心性が混在した状況に関連しているのではないかと思われる．

最後に，女子の両自己低群は，現実自己高群や推測自己高群よりも評価懸念が低いことが明らかとなった．彼女らは，いつも一緒に行動する友人が自分の良いところを認めてくれていないことを認知し，さらに，それを自ら受け入れてしまっている．そこには，“悪く評価されたらどうしよう”との不安が高い傾向というより，特定の友人以外の他者から肯定的に評価してもらうことへのあきらめがあるように思われる．また，この群の賞賛獲得欲求や拒否回避欲求はそれほど高くなかった．これらの欲求が「所属集団への帰属感を求める傾向の強さ」を示すものでもあることを考えると（菅原，1986），両自己低群の学級集団への帰属感や，学級集団を構成する一成員として「帰属したい」と思う気もちも，他の群に比べてそれほど高くないことが予測される．そのために両自己低群に属する女子の評価懸念が低いとすれば，評価懸念の程度が低すぎることもまた不適応的であると考える必要がある．

以上論じてきたように，評価懸念は，学校生活の中で級友や教師とうまくやっていきたいという思いが前提となって生じるものと考えうる．現実自己と友人推測自己がどちらも肯定的である両自己高群の評価懸念が低いのは，「仲間に受け入れてもらわなければ」とか「うまくやっていかなくては」という思いから解放されているためであろう．しかし両自己低群の場合は，現実自己と友人推測自己がともに肯定的でないことを考えると，仲間に受け入れてもらうことへの関心が低くなっているおそれがある．そして，そのために否定的に評価されることにも不安がないのだとしたら，評価懸念が低いことと学校生活がストレスが少なく楽しいということを，イコールの関係で捉えることはできない．評価懸念と学校生活における適応感や不登校傾向との関連については，今後，改めて検討する必要があるだろう．

まとめと今後の課題

本研究では，中学生の自己を，現実自己の肯定度とそれを支える友人推測自己の肯定度からとらえ，評価懸念との関連について検討した．その結果，2つの自己の肯定度ではなく，現実自己と同程度に友人推測自己を肯定していることが評価懸念と関連していることが明らかになった．この結果は，過大評価でもなく，過小評価でもないかたちで特定の友人から肯定されることが，評価懸念の低減に重要であることを示唆している．

特定の友人との関係をはじめとする人間関係は，学校生活を快適にする土台となる．人間関係で自己が「ありのまま」に認められないと，学校生活のなかで，本来の自己は，支えのない揺らぎやすいものになるのかもしれない．本研究の結果から，重要な他者からみた自己と現実自己との解離が，中学生の自己の揺らぎやすさを規定しているとも考えられる．揺らぎやすい自己を抱えた子どもは，学校という社会的場面で，評価面について積極性と消極性が混在した葛藤状態に陥ることになる．すなわち，自己顕示的でかつ防衛的な承認欲求が高まり，その結果，授業などのふだんの学校場面で，教師や級友から否定的に評価されることを過剰に心配することになると考えられる．

しかし，重要な他者の視点からみた自己が「ありのまま」の自己であることと，評価懸念との関連について言及するには，本研究の結果だけでは十分でない．なぜなら，「ありのまま」とは，ポジティブな特性だけでなく，ネガティブな特性についても重要な他者からみた自己と現実自己が一致した状態であると考えるためである．自分の悪いところを友人が知っており，そのうえでなお，仲良くしてくれていると認識することで，自己顕示的になる必要も，過剰に防衛する必要もなくなるのではないか．この点については，今後，ネガティブな特性から記述された自己概念と評価懸念との関係を検討することによって，明らかにする必要があるだろう．

引用文献

ブロス，P. 野沢栄司（訳）1971　青年期の精神医学　誠信書房
（Blos, P 1962 *On adolescence: a psychoanalytic interpretation.* New York: Free Press）

Cheek., J.M. & Buss, A.H. Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology,* **41**, 330-339.

遠藤由美　1992　自己認知と自己評価の関係 教育心理学研究，**40**，157-163.

榎本博明　1998「自己」の心理学　自分探しへの誘い サイエンス社

藤田英典・伊藤茂樹・坂口 里佳 1996　小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究　東京大学大学院教育学研究科紀要，**36**，105-127.

Harter, S. 1990 Process underlying adolescent self-concept formation. In Montemayor, R., Adams, G.R., & Gullotta, T.P. *From childhood to adolescence: A transitional period?* Newbury Park: SAGE.

本間恵美子　1994　対人不安的自己意識と自己概念　函館大学論究，**25**，25-55.

柏木恵子　1992　子どもの「自己」の発達　東京大学出版会

Martin, H.J. 1984 A revised measure of approval motivation and its relationship to social desirability. *Journal of Personality Assessment,* **48**, 508-519.

松尾直博・新井邦二郎　1998　児童の対人不安傾向と公的自己意識、対人的自己効力感との関係　教育心理学研究，**46**，21-30.

Moretti, M.M. & Higgins, E.T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology,* **26**, 108-123.

Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. Suls, J, & Greenwald, A.G. (Eds.) *Psychological perspectives on the self. Vol.3* New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

菅原健介　1986　賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求　心理学研究，**57**，134-140.

菅原健介　1988　対人不安研究における公的自意識の意義について　東京都立大学人文学部人文学報　**196**，103-116.

田中勝博・原野広太郎　1992　思春期の登校拒否児および健常児群における自己概念に関する関する研究　教育相談研究，**30**，8-15.

徳田安俊　1961　小・中学生の自己概念と適応との関係　福島大学教育研究所所報，**24**，24-29.

東京都立多摩教育研究所　1999中学生の友人関係に関する研究（東京都立多摩教育研究所）

Warren, R., Good, G. & Velten, E. 1984 Measurement of social-evaluative anxiety in junior high school students. *Adolescence,* **19**, 643-648.

渡邉淑美・長谷川浩一　1972　登校拒否児の自己像に関する一研究　日本教育心理学会第14回総会発表論文集，52-53.

Watson, D. & Friend, R. 1969 Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **33**, 448-457.

山本淳子　2001a　評価懸念尺度の作成　日本教育心理学会第43回総会発表論文集　180.

山本淳子　2001b　中学生の自己概念に関する研究　日本心理学会第53回大会発表論文集　986.

—2001. 9. 28 受稿—

謝辞）

本論分の作成にあたり，丁寧かつ適切なご助言をくださいました田上研究室内地留学研究生の先生方に，心よりお礼申し上げます．また，調査にご協力くださった先生方，生徒の皆様に深く感謝申し上げます．

Appendix 1　評価懸念尺度

1　人が話をしているのを見ると，自分のことを話しているのではないかと気になります．
2　わたしは，人が自分の短所に気づくのではないかとよく心配になります．
3　みんなと運動をするとき，自分がどう見られているのか気になります．
4　わたしは，ほかの人が自分をどう思っているかを気にしすぎていることがあります．
5　人と話をしていると，あいてが自分をどう思っているか気になります．
6　わたしは，みんなの前で失敗したらどうしようと，よく心配になります．
7　だれかがわたしのほうを見ていると，自分をどう思っているのか気になります．
8　わたしは，自分が人から何かよくないことを言われるのではないかとよく心配してしまいます．
9　みんなの前で発表するとき，自分がどんなふうに見られているのか気になります．
10　わたしは，人から言われたことを気にしすぎていることがあります．

Appendix 2　自己概念尺度（ポジティブ領域）

1	明るい
2	思いやりのある
3	スポーツがとくい
4	人のきもちがわかる
5	がんばりや
6	かっこいい（かわいい）
7	たよりになる
8	頭がいい
9	前向きである（くよくよしない）
10	おもしろい
11	自分に自信がある
12	はきはきしている
13	強い
14	だれとでも仲良くなれる
15	おだやか